

文学部教員によるエッセイ

# 私の選択

歩きだしてしまった方角

八尾 史（インド哲学仏教学）

抗いがたい魅力につかまってしまった話

木下 華子（日本語日本文学（国文学））

流されながらの選択

松田 陽（文化資源学）

このコーナーでは毎年、文学部の先生方をお願いして、今専門にしている学問との思い出などを語っていただいています。文学部ホームページに掲載されているバックナンバーでは、過去の先生方のエッセイを読むことができます。以下は最近5年間に掲載されたエッセイのタイトルです。タイトルだけみても、文学部の先生方の学問との出会い方、つきあい方が実に多種多様であることが感じられるのではないのでしょうか。

2025年	
吉田 寛 (美学芸術学)	新たな学問を創造できる場所
島田 竜登 (東洋史学)	図書館の書庫
塩塚秀一郎 (フランス語フランス文学)	「役立ちたくないので数学者と文学者に憧れている」
浅野 倫子 (心理学)	結果オーライにする (現在進行形)
2024年	
加藤 隆宏 (インド哲学仏教学)	「私の選択？」
長屋 尚典 (言語学)	人とは違う道
藤井 光 (現代文芸論)	気がついたときには、もう選択は終わっていた
堀江 宗正 (死生学)	「私の選択？」
2023年	
西村 明 (宗教学宗教史学)	圧倒的な現実にもとばを与える
根岸 洋 (考古学)	考古学を選んだこと
佐藤 至子 (国文学)	読めば読むほど
土肥 秀行 (南欧語南欧文学)	日伊間の博士号ダブルディグリーの仕組みを創設する
2022年	
菊地 達也 (イスラム学)	せっかくだし
井島 正博 (国語学)	認識の仕組みを求めて
小林 真理 (文化資源学)	自分の直感を信じる。
芳賀 京子 (次世代)	女の一生と人生の岐路
2021年	
納富 信留 (哲学)	不東一日本を出るという決断—
梶原三恵子 (インド語インド文学)	学生時代のいくつかの選択の記
塚本 昌則 (フランス語フランス文学)	フランス語を学ぶことで新たな自分と出会う
出口 剛司 (社会学)	敵前を、大事なものを抱えてきわどくすり抜けていくやり方

<https://www.lu-tokyo.ac.jp/teacher/essay.html>

## 歩きだしてしまっただ方角

八尾 史（インド哲学仏教学）



私の選択、と呼べるようなことを大学に入ってこのかたした記憶がありません。歩きだしてしまっただ方角へ先も見えずに歩いているうちに二十何年経っていて、いまだに先が見えません、などというぱっとしない話をするのもためらわれるのですが、それでも進路に迷っている人の考える材料になることが多少はあるかもしれませんので、思いつくままに来歴を書きます。

仏教の勉強をすることと研究者になることは、高校二年のときに決めていました。それでいて仏教学が何を学ぶ学問なのかは知りませんでした。というより、仏教学と呼ばれる学問が存在することを知りませんでした。もちろん、研究者が何を学ぶ人なのかも知りませんでした。

埼玉県公立の中学、高校に通っていた十代のころ、宗教や思想にかかわるものを読んだり見聞したりするのが好きで、記紀神話や『ハディース』やエル・グレコの宗教画もおもしろかったのですが、とりわけひきつけられたのが仏教でした。何がきっかけだったのかはわかりません。というより、単一のきっかけなどはなかったのでしょうか。日本文学を読めば仏教はごろごろ出てきますし、宮沢賢治は特別好きな作者の一人でした。中学の修学旅行以来広隆寺の弥勒菩薩像にとりつかれていて、ついでにそれを生んだ弥勒信仰の、五十六億七千万年後の救済というむやみなスケールの大きさにもとりつかれていました。高校の修学旅行で京都を再訪してからは病膏肓に入るで、世界の終わる日には大秦にいなければならぬ（その日に東海道新幹線が動いているかどうかは問題だ）などと本気で考えたりしていました。そのうちエチベットの仏教関連の本を読みあさってこれはたいへんなものだという事になり、仏教を知らねばならぬ、という思いいれができあがったのだと思います。調べたら東大文学部にインド哲学仏教学専修課程というものがあったので、そこへ行けば仏教の勉強ができるのだろうという単純な考えで文科三類を受験しました。

入学後はせっせとサンスクリット語の授業に出たり、いろいろな分野の講義を楽しく聴いたりしていましたが、一年の秋学期に本郷で開講されていた下田正弘先生

の学部・大学院共通の講義に出たのが、今から思えば研究という世界を垣間見たはじめだったように思います。それは仏教研究についての講義でした。近代の仏教学が19世紀ヨーロッパで生まれた学問であることを知って仰天し、神のいない宗教に出会った西洋人の驚きを追体験し、その後の授業も刺戟の連続でした。おもしろいと同時に難しくもありましたが、必死にノートをとるうちに漠然と理解しはじめたのは、学問をするということは学問の名で自分が何をしているかを問うことでなくてはならない、ということでした。とはいえ仏教学なるものの内実はわたしにはいまだ曖昧模糊としていました（文献学という言葉を知ったのはもう少し後で、それはもっとわかりませんでした）。

「印哲」はやめといた方がいい、と駒場の理工系の先生に言われたのはたしかそのころです。進学先どうするの、と授業後の飲み会で聞かれたときのことで、印哲です研究者になろうと思いません、と答えたらそう言われたのでした。就職先がないというのが理由だったと記憶します（よくある誤解です）。親切心からの助言だったにちがいませんが、言われた方は馬耳東風で、迷わずそのまま印哲に進学しました。

就職のことは何も考えていませんでした。

そんなふうに進学に躊躇はなかったのですが、しかし本郷で行われていたことのごわさは想像を超えていました。毎日サンスクリット文献講読の予習に明け暮れ、学部の二年間くらいではちつとも読めるようにならず、仏教のことは勉強すればするほどわからなくなっていくような気がしながら大学院に進学しました。

院には入ったものの、修士論文で何を研究したらいいのかわからず途方に暮れました。先輩から「根本有部律（こんぽんうぶりつ、インド仏教の僧院規則文献）」の中の経典というテーマを勧められ、何の考えもなく「それやります」と答えたのが因縁のはじめで、今にいたるまでそれをやっています。博士論文では根本有部律の「菓事」という章をチベット語訳から日本語訳することになりました。これは苦行でした。全部で四百葉（フォリオ）ほどある「菓事」の葉番号を一枚の紙に印刷し



研究室での授業 学生とサンスクリット写本を読む

て、毎日進んだところまで印をつけることにしましたが、半葉しか訳せない日もよくありました。ただただ混沌とした説話の羅列に頭が麻痺していくようで苦痛でならず、人類の叡智に触れている気はさらにせず、論文を提出しても達成感はありませんでした。提出の翌々日に夜行バスに乗って隠岐に行き、三日ほど海をながめていました。水は透き通ってきれいで、コピーして持っていった『後鳥羽院御口伝』はちんぷんかんぷんでした。

博士号取得後は、あちこちの公募に落ちたり拾われたりしながら研究員の職を転々としました。カナダでポスドクをした三年間を含め、研究に専念できる環境に長くいられたことは幸運でした。「薬事」との因縁は続いていて、それというのも呪われたことに今度は英訳を始めてしまったからでしたが、そうやってしつこく読んだおかげで、この奇妙な文献の中で何が起きているのかが段々薄皮をはぐように



ポスドク先のマクマスター大学を再訪（2026年4月）

見えてきました。五里霧中で和訳をしていたときには素通りしていたチベット語訳と漢訳の重要な違いや、一見無秩序でいて何か意味がありそうでひっかかっていたエピソードの配列の中に、「薬事」編纂者が何をしていたのかを示す手がかりが隠れていたのです。

一方、思いがけない幸いでとりかかることになった「薬事」サンスクリット写本断片の解説という仕事がありました。細かくちぎれてばらばらになった写本でしたので容易ではありませんでしたが、作業自体は苦にはならず、むしろ中毒になるくらい没頭していられました。うんざりするほどチベット語訳を訳して内容が頭に入っていたからできた部分もありました。読み取れた僅かな文字列から新しいことがわかると嬉しく、それを学会発表や論文にして人に伝えるのも楽しくなりました。

後から考えると、「留学」と「写本」は学生時代に敬して遠ざけていたことでした。前者の理由はわたしの英会話能力がお話にならなかったからで、後者についても、興味関心はありながら、自分が何かできるとは思っていませんでした。しかしどちらもいざ直面してみると、しないという選択肢はありませんでした。そして得るところは数えきれないほどありました。

その後就職をして教育にも携わるようになりましたが、字数も尽きました。誰か迷っている人の参考とはいわず、励ましにでもなればさいわいです。

## 抗いがたい魅力につかまってしまった話

木下 華子（国文学）



私の専門は、日本の中世文学、平安時代後半から鎌倉・南北朝・室町時代という動乱の時期の文学である。なぜ、中世文学の研究者になったのか。どういう選択を重ねてここに至ったのか。それを問われているのだと思うのだが、大きなきっかけがあって、何かに感銘を受けて、選択を行ってきたわけでもないように思う。後になって、「ああそうか」「だから私はこうしたのか」と納得することのほうが多い。そんな私でも研究者を続けていられるのだから、それでよいのかもしれない。

国文学を学びたいというのは選択するまでもなかった。幼少期からいわゆる本の虫で、物語の類いが大好き。本を選ぼうと本棚を見ているうちに、その場に座り込んで読み始めてしまい、気が付いたら辺りが暗くなっているような子どもだった。中学・高校になると、水がさらさらと流れるように古文に惹かれ始め、大学は文学部、学ぶのは国文学と自然に定まっていったように思う。

最初の岐路らしきものは、本郷に進学した後に訪れた。3年生の前半くらいまでは、中古文学、『源氏物語』で卒論を書こうくらいの気持ちだっただろうか（駒場の期間に他の時代や作品を勉強していなかっただけかもしれない）。しかし、授業、特に演習を経験する度に、異なる感覚が大きくなっていったのである。中世文学の演習が楽しくてしかたない。3年次の演習で読んだ作品は、鴨長明の『無名抄』。『方丈記』の作者が書き記した、歌論・歌学の書である。私の担当は「ますほの薄」という章段であり、登蓮法師という人物が、「ますほの薄」という歌語を知る人を訪ねて、雨の夜に京都から摂津（大阪）まで蓑笠もなしに走り、その秘伝を手に入れて後に長明に伝えるというものだった。この人は何をしているのだろうか、と思ったのだ。雨が止むのを待てばいいではないか。なぜ夜の危険をおかしてまで何十キロも進むのか。それを書きとめて共感している作者は何を考えているのか。ただただ不思議だった。その不思議なことが成立する背景、必然性を知りたくて、卒論のテーマとし、おのずと中世文学研究に分け入ることになったのである。ただ、さすがに安直かなと思い、3年生の春休みに総合図書館で上代から近世までの作品を叢書で読んだ。今思えば、私が惹かれているのは中世文学だと納得するための実感のよう

なものがほしかっただけだろう。案の定、卒論のテーマは維持されたのだった。



梅沢記念館旧蔵東京国立博物館蔵『無名抄』より  
「マスホノスゝキ」の章段の写真  
出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム  
([https://colbase.nich.go.jp/col/lection\\_items/trm/B-3181?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/col/lection_items/trm/B-3181?locale=ja))

いう思いだったのだろう。そこで、改めて件の『無名抄』を読み、曲がりなりにとも研究の手付きで調べ始めたのだった。

結果、また、楽しくなってしまったのである。しかも、今度の楽しさは深かった。これまで教わってきた研究の手順を踏んで作品に向き合くと、今まで見えなかったものが見えてくる。私はよく、言葉の向こう側に景色が見えるという言い方をしているのだが、その感覚を得た最初の経験だったかもしれない。新しい景色が見えること、その景色が重なりながら道筋や世界が立ち上がってくることがぞくぞくするほど楽しくて、次へ次へと手を進めたくなっていた。私は文学研究の魅力（魔力？）につかまってしまったらしい、そう感じたことをはっきり覚えている。

こうなると、またまた直線的な思考で研究を続けたいと思うものである。第二の岐路はこのあたりなのだろうが、選択した感覚はない。もう逃げられないと覚悟したというのが近いだろう。中世文学とそれを研究することに、私は抗いがたい魅力を感じているらしい。逃げたところで、結局つかまってしまう。ならば、無駄な抵抗はやめて、手放すなんて思わないで、正面から向き合おう。何のことはない、悩める若者がようやく自分と向き合うことができた、自分に正直になっただけの話である。

そのようなわけで、研究の道で生きていこうと腹をくくり、今に至っているのだが、もちろん紆余曲折も逆境も経験した。あんなに本が好きだったのに、活字一つ読めなくなってしまった時期もある。ただ、どのような折も、研究をやめるといふ選択肢は現れなかった。もはや、研究は選択する対象ではなく、私を支えてくれる存在になっていたからだろう。

さて、好きなだけでは限界が生じるもので、大学院進学後は見事に打ちのめされた。できない、かなわないのである。勉強と経験が足りないだけなのだが、若い時というのは思考が直線的なのか、研究者は無理だからやめようと思った。実家の両親にも、修士課程を修了したら就職すると宣言したほどである。そうは言っても、やめるにしても、修士論文はちゃんと書こう。ずっと好きだった道から離れるのだから、けじめをつけなければと

さて、振り返ってみると、私の研究人生のうち、選択らしきものはたった一つ。卒業論文をどうしようか迷っていた3年生の終わり頃、中世文学を選んだというものである。ただ面白かった、好きだったからなのだが、この段階では、それがなぜ中世文学なのかはわかっていない。だから、この選択も、主体的に選んだものではなく、するすると引き寄せられたというのに近い。ただ、最近になって、少しだけ、私が惹きつけられた理由、中世文学を選択した理由がわかったような気がする。

周知のごとく、日本の中世文学は「無常」という言葉で象徴される。中世は「無常」の時代、中世文学に宿るのは「無常観」。確かに、中世は、数多くの戦乱によって、社会のシステムが何度も再構築される激動の時代であった。おそらく、日本の歴史の中で、一定期間に最大数の戦乱が生じた時代と言って差し支えないだろう。人々が数多くの困難や社会変動に直面せざるを得ない中で、物事は永続しないという「無常」の感覚と、そこに対してどのような姿勢でのぞむべきかという自覚、いわゆる「無常観」が醸成し、中世文学のそこここに現れるのも道理である。

しかし、中世文学に向き合うと気付くのだが、作品もそれを担う人々も、明るく、たくましく、したたかなまでに躍動している。和歌・連歌、説話、軍記、能・狂言、御伽草子、様々なジャンルの文学が、前代からの革新を遂げ、互いに連関し合って、縦横無尽な展開を見せる。「無常」が充満する時空間において、困難を受けとめ、乗り越えて、新しさを拓く骨太のエネルギー。奪われてもひしがれても、めげることなく、ひこばえのように芽吹く言葉の数々。なるほど、私が惹きつけられてやまないのは、「無常」の時代におけるたくましい生命力としなやかな創造力なのだろう。私は、この不思議な矛盾を、その必然性と機構（メカニズム）を解き明かしたいのだ。研究のとば口に立って30年、ようやく自分と自分の好きな対象を識ったということだろうか。

3年生の時の選択は間違っていなかったようである。好きな理由も、それで何ができるかもわからない。それでも、惹きつけられてやまないもの。そんな抗いがたい魅力——中世文学研究——につかまって、しがみつきながらここまでやってきて思うのは、「これでよかった」である。



1番大教室での「国文学特殊講義（「無常」からの創造—中世文学を考える）」の授業風景

## 流されながらの選択

松田 陽（文化資源学）



人は、実にたくさんの選択をしながら生きていくが、私が今の専門にたどり着く上で決定的となった選択は何だったか。開陳して誇れるようなものがあればよいのだが、出てこない。自分自身が選んだというよりも、環境や状況が選んだ、という思いの方がはるかに強いからだ。

今に至るまでの道のりが川だとすると、舟に乗って、流されながら下ってきた。大河ではなく小川。舟も、笹舟のように小さい。たくさんの石にぶつかって進路が変わり、風雨を受けて進路が変わり、流され、流されつづけて、今の地点にいる。主体的に生きることが重んじられる今日の風潮を考えると情けない航路かもしれないが、本当なのだから仕方ない。

とは言え、自ら笹舟に乗り込んだのだし、小さな棹を幾度か思いきり突いたことも事実だ。それらは選択と言えるかもしれないので、そうした感覚のある思い出をたどってみる。

高校時代、受験勉強をしているうちに、世界史が面白いと感じるようになった。社会や文化、国、文明といったものの栄枯盛衰を引きおこしたものが何かを考えることに夢中になり、大学で学びたいと思った。『マスターキートン』の影響もあったかもしれない。こうして文学部の門を叩くことになったのだが、受験の目標を下げるつもりか、と叱られたことを覚えている。それでも、自分が学びたいことを見つけた喜びを実感していたので、貫いた。

大学に入り、西洋史学専修課程に進学した。興味深い文献をたくさん読んだが、二年間学ぼうちに、文字情報だけから過去を考えることへの限界を感じるようになった。と、格好つけて言ってみたが、忍耐力がなかっただけである。同期の佐藤昇の話聞き、こういう優秀な人のための学問だと痛感したことも大きい。

ともあれ、文学部での学びが霞を食うことのように思えてきて、自分はずっと実社会なるものを知らねばならないと考えた。そこで民間企業に就職する。が、実社会を知り始めると再び学びたくなくて、大学院人文社会系研究科に戻ることにした。

ここで好奇心が湧き、古代ローマ遺跡の発掘調査に参加することになる。文字ではなく、遺構や遺物といったモノ資料から過去を考えたいと思ったからだ。文学部

時代に強めた古典考古学や美術史学への関心にも後押しされた。



古代ローマ遺跡の発掘調査

イタリアで参加したこの発掘調査が、たいそう面白かった。さまざまな意味で、脳天をガツンと叩いてくれるような経験だった。そこで、ローマ考古学を専門にしようと考えたが、イタリアで仲良くなったドメニコ・エスポジト、通称ミンモと話していて、打ちのめされる。幼少期からポンペイの遺跡内で遊んでいたというミンモは、ローマ考古学の道をまっしぐらに突き進んでい

た。ローマ考古学の隅から隅まで知っているこんなやつに、自分は絶対になかない——勝手にそうしてしまった。いかにも青臭いが、どうせやるなら世界で一番になれるようなことをしたいと、本気で思っていた。

この敗北感が、新たな道をひらく。その時までには私はすっかりローマ遺跡に魅了されていたのだが——杉山浩平兄さんと一緒にたくさんの遺跡を訪れたものだから——こうした遺跡を現代社会にもっとうまく位置づける方策を研究しようとするようになった。これなら、ミンモにも負けず、世界の第一線で勝負できると思えた。

ちょうど、人文社会系研究科に文化資源学研究室が創設される時期だった。現代社会で遺跡という文化資源をいかに保全・活用していくのかを考える場が、運良く目の前にあらわれた。加えて、英国留学用の奨学金をもらえることになり、以後、東大とユニバーシティ・カレッジ・ロンドンという二つの大学にて、修士課程と博士課程の学びを修めることになる。途中、パリのユネスコ文化遺産部でインターシップとコンサルタントの仕事をし、またイタリアでの発掘調査にも毎年夏参加したので、ずいぶんと濃密な時間だった。自分の専門は、考古学と現代社会との関係を探究するパブリックアーケオロジである、迷いなく言えるようになった。

この間、持ち金が底をつき、将来の見通しも立たず、お先真つ暗という辛い思いもした。昼食代をいかに2ポンド以内におさめるかに日々苦慮したものだ。英国時代は、私のキャリアにとって断トツに最良の期間であったが、人生のどん底を経験したのもこの時である。考古学には過去はあるが、未来はない——とよく言った。そこそこウケた。

ここで、セインズベリー日本藝術研究所に拾われる。ポストドクならぬ、ミッドドクターとでも呼ぶべきフェローシップをいただき、人生初の研究イコール仕事という経験をロンドンでした。実力で勝ち取ったというよりは、人の縁で授けてもらっ

た、という感覚だ。

フェローシップに救われて博士号を取得した後、英国の大学に就職したいと願うようになった。研究を続けたかったからであり、英国の大学がどのように意思決定をしているのかを内部から見たいと思ったからでもある。ありがたいことに、この願いも人の縁によって叶い、美しい歴史的都市ノリッチにあるイーストアングリア大学で教鞭を取るようになった。

大学就職をしたところ、専門を広げる必要を感じ、パブリックアーケオロジーに加えて、文化遺産研究の看板をかかげるようになった。文化遺産研究であれば、人間社会と過去との幅広い関わりを探究できると考えたからだ。こうして、建築、美術工芸品、文書、用具、祭礼、技術、景観、出来事、慣習のように、「歴史的」や「伝統的」といった言葉を前につければ成立するおおよそすべての事象を考察対象にするようになった。考えること、調べることが無限に出てきて、研究に飽きるものがなくなった。イーストアングリア大学が珠玉の大学博物館を擁していたこともあり、博物館研究も手がけるようになった。



イーストアングリア大学

そうしているうちに東大より声をかけてもらい、2015年から文化資源学研究室にて奉職することになった。文化を「ことば」と「おと」と「かたち」を手掛かりに根源に立ち返って見直そうとする文化資源学は、文化遺産研究と親和性があり、自然と古巣に戻ることができた。

以上、今の専門にたどり着くまでの過程を、「私の選択」がなるたけ浮き彫りになるように振り返ってみたが、何がどこまで主体的な選択であったのかは、やっぱりよくわからない。笹舟に乗って川を流されてきた、という私の実感も、少しはおわかりいただけたのではないと思う。

私の選択は、この拙文を読む若い方々にはあまり参考にならない気がする。いかにも型のない道を進んできたものだと、我ながら思う。でも、人のキャリア選択なんて、意外とそんなものかもしれない。

生きている中で、人は無数の小さな選択をし、またいくつかの大きな選択をするのだろうが、どこまでが本当に自分の選択であるのかは曖昧だ。「悔いのない人生を過ごそう」などとよく言うが、私の実感からすると、どのような選択をしようと悔いは残るし、それが人間だ。それでもやっぱり、各々の場面で選択をしつづけていくしかない。